

中 学 校

平成23年度

教育研究員研究報告書

国 語

東京都教育委員会

目 次

I	研究主題設定の理由	
1	社会的背景	1
2	生徒の実態	1
II	研究の視点	2
III	研究の仮説	3
IV	研究の方法	
1	研究構想図	5
2	仮説の検証	5
V	研究の内容	
	指導の実際	
	〈指導例 1 : 第 1 学年〉	6
	〈指導例 2 : 第 2 学年〉	13
	〈指導例 3 : 第 3 学年〉	19
VI	研究のまとめ	24

語彙を豊かにし、表現する力を高める指導の工夫

I 研究主題設定の理由

1 社会的背景

平成20年1月の中央教育審議会答申には「自分や他者の感情や思いを表現したり、受け止めたりする語彙や表現力が乏しいことが、他者とのコミュニケーションがとれなかったり、他者との関係において容易にいわゆるキレてしまう一因になっており、これらについての指導の充実が必要である」ことが示されている。2009年(平成21年)のPISA調査では、日本の生徒は自由記述式の問題で無答率が高くなる傾向があるとの結果が出た。平成22年実施の全国学力・学習状況調査でも、相手に応じて表現を工夫して書くことや、自分の考えを具体的に書くことに課題があると指摘されている。これらの結果や指摘は、先の中央教育審議会答申で触れた「語彙や表現力」の育成という課題が解決されていないことを裏付けるものと言える。

平成24年度から全面実施となる新学習指導要領では、改訂の基本方針の一つに「言葉を通して的確に理解し、論理的に思考し表現する能力、互いの立場や考えを尊重して言葉で伝え合う能力を育成すること」を重視するとしている。国語科の目標にある「国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高める」ための具体的な手だてとして、語彙や表現力を充実するための指導の工夫を考え、実現していくことが求められている。

2 生徒の実態

平成22年度の東京都教育委員会による「児童・生徒の学力向上を図るための調査」において、「表現の仕方に注意して読み、内容について理解すること」では、比喩的な表現で書かれた内容について意味を捉えて書くことに課題が挙げられた。また、平成23年度の「東京都立高等学校入学者選抜学力検査結果に関する調査」では、まとめと指導の改善の視点として「語彙学習を基礎として、前後の文脈から語句の意味や内容を類推しながら読み取る力を育成する指導が大切である」との指摘がある。こうした調査報告から、学んだ知識を生かして文章を読んだり、言葉に着目して文章内容を読解したりすることを苦手とする生徒が少なくないことが分かる。

実際に作文指導などの書く場面でも、文章を書くことを苦手とする生徒は多い。そのほとんどは書く内容が分からず、言葉が思い付かず「すごい」を羅列したり、良い悪いという表現のみで記述したりする傾向がある。発言の場面においても単語で答えることが多く、自分の意見を意味のあるまとまりとしての的確に表現できる生徒は少ない。また、生活の中では、仲間同士だけで通用する言葉の使用が多く、正しい言葉を使えないことも多い。さらに、伝えるべき内容を最後まで言わずに省略することもある。十分に自分の気持ちを伝えることができず、暴力に訴えてしまう生徒もいる。

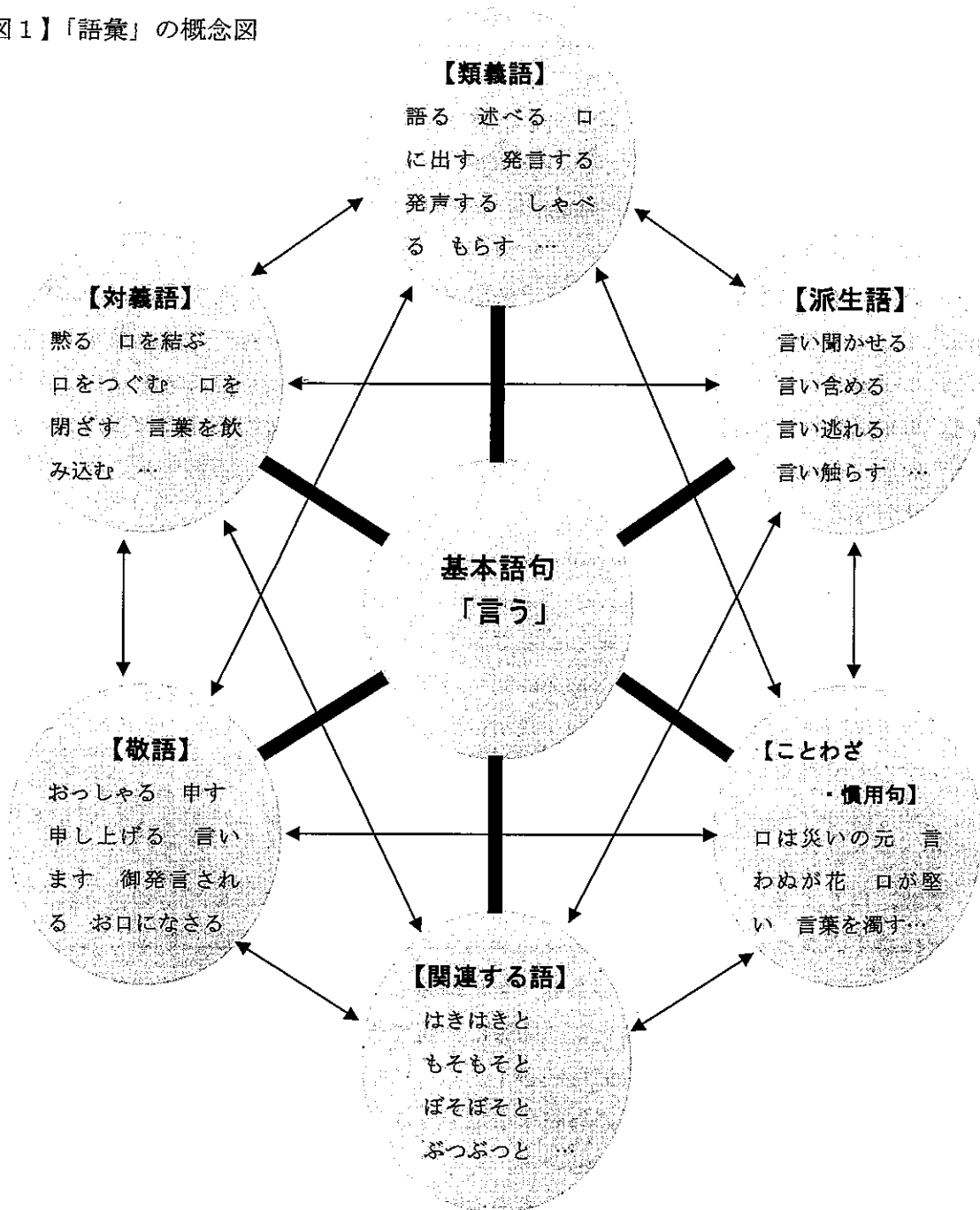
このような生徒の実態から、自分の考えや気持ちを十分に伝え合えていないという現実が

分かる。伝え合うためには、一つ一つの語句の意味を理解するだけでなく、自分のもつ語彙を活用して表現する能力が必要である。

II 研究の視点

本研究は、生徒の語彙を豊かにすることで表現する力を向上させることをねらいとする。ここでいう「語彙」とは、辞書的な意味だけでなく、その語句から与えられる派生的なイメージや音声の響きなど（語感）も意識しながら理解し使用することができ、他の語句との関連の中に位置付けることができる言葉の総体である。【図1】

【図1】「語彙」の概念図



平成16年2月の文化審議会答申「これからの時代に求められる国語力について」では、考える力・感じる力・想像する力・表す力を支える基盤の第一に、語彙を挙げている。換言すれば、語彙を豊かにすることは、豊かに考え、豊かに感じ、豊かに想像し、豊かに表す力の育成につながる。

では、「語彙を豊かにする」とはどういうことか。概念図に示したように、「語彙」は独立した一単語や語句ではない。したがって、語彙の指導は、単純に語句の数を増やしていくいわゆる語句指導とは異なり、語句同士のつながりを密にし、広げていくものとなる。本研究では、表現する力の育成につながる語彙指導を目指し、「語彙を豊かにする」ために次の三つを身に付けさせることとした。

- ① 語句と語句とを結び付ける（つながりを拡大する・密にする）ための知識
- ② 自分の語彙を「使う」技能
- ③ 主体的に「語感を磨き、語彙を豊かに」していこうとする意欲・態度

生徒の言語生活を見ると、語句の意味などを理解してはいるが、実際に話したり書いたりする場面で使うことができないことが多く、これを、実際の活用場面で「生きた言葉」にしていくことが重要な課題である。この三つをバランスよく身に付けさせることで、生徒は言語活動の様々な場面において言葉を探し、選び、結び付けながら、より適切かつ豊かに表現できるようになると考える。

本研究では、こうした視点を踏まえ、語彙を豊かにすることを通して表現する力の向上を図るための指導の工夫について、考察・検証していく。

Ⅲ 研究の仮説

前述のように、語句と語句とを結び付ける（つながりを拡大する・密にする）ための知識、自分の語彙を自在に操る技能、そして自ら語感を磨き、語彙を豊かにしていこうとする態度を身に付けることが、生徒の語彙を豊かにする。語彙を豊かにすることは、「国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を養い言語感覚を豊かに」するという、国語科の目標を達成するための基盤となる。

東京都教育委員会は、平成22年度の「児童・生徒の学力向上を図るための調査」の結果分析から、授業改善のポイントとして「日常生活を想定した言語活動を設定し、使用する語を増やす指導法を工夫すること」を挙げている。この指摘にあるように、抽出されたある語句について個別に行われる語句指導に対して、語彙指導は話すこと・聞くこと・書くこと・読むことの具体的な活動の中で行われるものである。またそれは、実際の言語生活の中で生きた知識・技能として有効に活用されていかなければならない。話す・聞く・書く・読む活動の中で語彙を豊かにし、それによって話す・聞く・書く・読む力を向上させていくという、連続した学習活動を段階的・系統的に展開させていくことが必要である。

本研究では、様々な活動の中で多角的に行われるべき語彙指導について、「読むこと」と「書くこと」を基軸とした一つのモデルを提案する。すなわち、「読むこと」の中で語彙指導を行い、そこで身に付けた知識や技能を「書くこと」に活用させ、それを互いに「読み合う」中

で、学習の成果や課題を確かめるとともに、更なる学びへの意欲を喚起する「学びのサイクル」である。【図2】

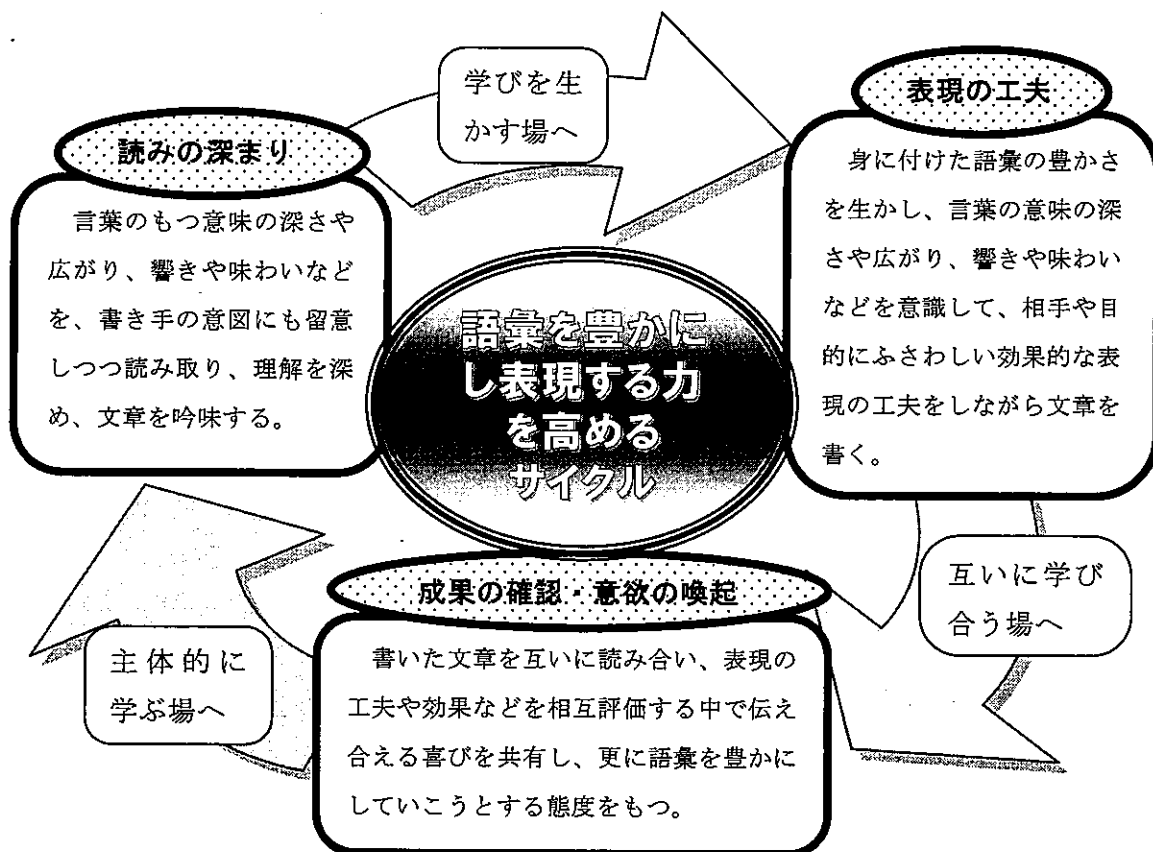
書かれたものを読む際に、そこに用いられている語句の表面的な意味だけではなく、その語句のもつ語感や、他の語句とのつながりの中で認識される意味の広がり、その語句がそこに用いられている書き手の意図などにも注目し、語彙を豊かにするための基本的な知識や基礎的な技能を身に付ける。次に、身に付けた知識・技能を活用する言語活動として、相手や目的に応じて書くことの指導を行う。豊かな語彙を生かすことができれば、そこから発信される情報は、より相手や目的に応じた適切なものとなるはずである。そして、発信した内容を互いに読み合う中で、工夫や学びの成果を確かめ合い、更なる学びへとつなげていく。そうした「学びのサイクル」を段階的・系統的に展開させていく過程を通して語彙指導を行うことで、表現力が育成されるとともに、理解する力、伝え合う力も向上すると考える。

以上のことから、本研究の仮説を次のように設定した。

—仮説—

言葉のもつ意味の深さや広がり、響きや味わいなどを吟味しながら、読む・書く・読み合う活動に取り組むことで、語彙が豊かになり、表現する力が高まるのではないか。

【図2】「読むこと」「書くこと」を軸とした学びのサイクル



IV 研究の方法

1 研究構想図

研究主題 「語彙を豊かにし、表現する力を高める指導の工夫」

—仮説—

言葉のもつ意味の深さや広がり、響きや味わいなどを吟味しながら、読む・書く・読み合う活動に取り組むことで、語彙が豊かになり、表現する力が高まるのではないか。

—検証授業の内容—

- ① 言葉のもつ意味の深さや広がり、響きや味わいなどを書き手の意図に留意しつつ読み取り、理解を深め、文章を吟味する。
- ② 身に付けた語彙を生かし、言葉の意味の深さや広がり、響きや味わいなどからなる言葉の豊かさを意識して、目的や相手に沿って効果的な表現の工夫をしながら文章を書く。
- ③ 書いた文章を互いに読み合い、表現の工夫や効果などについて相互に評価することで、伝え合える喜びを共有し、更に語彙を豊かにしていこうとする意欲と態度を養う。

考察・まとめ・指導法の提示

2 仮説の検証

本研究では、『読むこと』『書くこと』を基軸とした学びのサイクル」を授業において展開し、その過程で語彙指導を行うことで表現力を育成し、さらに、理解する力、伝え合う力の向上につなげる。このサイクルを検証授業の学習過程に位置付け、その妥当性を検討、分析、考察することで、仮説を検証し、成果と課題をまとめる。

●検証の方法

第1学年

- 1 宮沢賢治の手紙文を読み、用途や目的に応じて語句を分類できることを知り、語彙の広がりに触れる。
- 2 語句の集合体としての語彙を理解し、意識して語句を選択し、多様な表現を用いて文化祭や移動教室の作文を書き直す。
- 3 書いた作文を班の中で相互交流し、語彙の広がりや表現の工夫を確かめ合う。

第2学年

- 1 『走れメロス』の「笑う・怒る」に着目し心情理解を深め、作者の表現の工夫を学ぶ。
- 2 合唱コンクールの作文を「太宰治」の視点で書き直す。
- 3 グループで作品を読み合い、工夫点を相互評価する。班の代表作品をクラス発表する。

第3学年

- 1 『あの時かもしれない』を読み、人との関わりの中での自分の成長を文章にまとめる。
- 2 『パールハーバーの授業』を読み、表現の工夫や語句の選び方を参考に文章を推敲する。
- 3 互いの文章を読み合い、内容や表現の工夫等について意見を交流し、互いに学び合う。

V 研究の内容

指導の実際

〈指導例1：第1学年〉

(1) 指導のねらい

この単元では、言語を適切に使う力を支えるものとして「語彙」に関心をもたせ、「語彙を豊かに」していこうとする態度を育むことをねらいとする。一つ一つの言葉のもつ意味の深さや広がり、響きや味わいなどに注目させることで、「語彙」とは何か、「語彙を豊かにする」ことで、どのような力が身に付くのかに関心をもたせる。さらに「生徒がその場に応じて適切な言葉を選択し、主体的に表現する言語活動」に取り組みさせることで、今後の段階的な語彙指導へとつながる基本的な知識・基礎的な技能の習得を図る。

(2) 教材観

教材名 『宮澤賢治の手紙』（「気持ちを伝える言葉辞典」実務教育出版刊）

宮澤賢治の作品は小学校の教科書教材にも「雪わたり」や「やまなし」が取り上げられている。生徒は、作者独特の比喩表現や擬態語、擬声語のおもしろさをよく覚えており、また、小学校時代に他の作品も読んだという声も多い。この「手紙」の文章では、「怒り」の表現が色で表されていることや、身体から発せられる感情を表す比喩表現などに着目させる。作者が「自分が表現したい感情」をどのような言葉を選んで表現しているかを読み取らせることで、生徒自身の中に自分もより豊かに表現したいという意欲を喚起できる教材である。

また、生徒の語彙を増やしていくための学習活動として、語句カードを作成させ、裏に意味を記入させる。このカードの作成によって、生徒は自分が身に付けた語彙を確認するとともに、他の生徒の語彙を知り、更に自分の語彙を増やしていくことができる。また、意味を記入することで、辞書を活用する習慣も身に付けていく。

この語句カードを使って、表現の工夫をX軸に、気持ちの強さをY軸にとった比例のグラフのようにして語句カードを発表させる。自分の知っている語彙を相関的に捉えさせ、語彙の広がりを視覚的に理解させることに役立つ。カードや表を作成することで、語彙に対する関心を深め、互いに発表し、学び合うことによって理解語彙や表現語彙を増やしていくことができる。

(3) 評価規準

観点	ア 国語に対する 関心・意欲・態度	イ 書く能力	ウ 読む能力	エ 言語についての 知識・理解・技能
	① 辞書等を用いて、心情を表わす語句を集めながら、語彙を広げようとしている。 ② 手紙文に用いられる書き手の	① 相手に伝えたい自分の中心となる気持ちを、多様な語句を用いながら適切に文章に書いている。 ② 書いた文章を互いに読み合い、	文章に表れている心情を表わす語句に注目しながら、表現の特徴について自分の考えをもっている。	① 心情を表わす多様な語句があることを理解し、語彙について関心をもっている。 ② 語句の辞書的な意味を理解した上で、文脈上の意味と比較しながら注意して読み取って

表現の工夫を積極的に読み取り、自分の表現に生かそうとしている。	書かれた場面に適した語句の使い方について根拠をもって意見を述べている。		いる。
---------------------------------	-------------------------------------	--	-----

(4) 指導計画（3時間扱い）

- ① 本時の目標：『宮澤賢治の手紙』から書き手の心情を読み取り、言葉のもつ意味の深さや響き、表現の工夫に着目し、語彙の広がり気付く。
- ② 語彙の広がり学び合うことで身に付けた語彙を生かし、表現を工夫して文化祭や移動教室の作文を書き直す。
- ③ 書いた文章を互いに読み合い、表現の工夫や効果などについて意見を述べ合うことで、適切な語句の使い分けを知り、自分の表現に生かせるようにする。

【資料】「宮澤賢治の手紙」ワークシート

国語 く語彙を豊かにするく (一) (二) (三) (四) (五) (六) (七) (八) (九) (十)

○宮沢賢治が友人の保阪嘉内にあてた手紙を読む。

【学びのポイント】

- ・使われている言葉や表現に注目しよう。
- ・言葉や表現の違いから印象がどのように変わるかを考えてみよう。

私なんかこのころは毎日ブリーブ情ってばかりみす。何もしゃくにさばる音がさっぱりないのですがどうした奴やら人のぼんやりした顔を見ると、「え、ぐづぐづするない。」いかりがかって燃えて身体は酒精に入った様ような気がします。祝へ座って誰かの物と言ふのを思ひ出しながら急に身体全体で机をなぐりつけさうになります。いかりは赤く見えます。あまり強いとまはいかりの光が溢くようになって水の様に見える。逆には真青に見えます。

(出典「鬼神と社える言葉辞典」)

1 この手紙の中で、もっとも「怒り」が強く感じられる部分に線を引き、その理由を簡潔にまとめなさい。

2 この手紙の中で、もっとも興味をもった(面白い・うまい・不思議……)部分に……線を引き、その理由を簡潔にまとめなさい。

(5) 指導の展開例 (第1時)

① 本時の目標：『宮澤賢治の手紙』から書き手の心情を読み取り、言葉のもつ意味の深さや響き、表現の工夫に着目し、語彙の広がり気付く。

② 本時の学習と評価

学習活動	留意点	評価規準・評価方法
<p>○ 学習の前段階として、文化祭や移動教室での一場面における振り返りの作文を取っておく。</p> <p>○ 「語彙を豊かにする」ねらいについて確認する。</p> <p>○ 『宮澤賢治の手紙』から様々な言葉に込められた書き手の心情を読み取る。</p> <p>○ 和語・漢語・外来語、慣用句、擬態語・擬声語を復習する。</p> <p>○ 前段階で書いた文化祭や移動教室の作文を班で交流し、優れている表現を抜き出し、語句カードを一人一枚作成する。</p> <p>○ 和語・漢語・外来語、慣用句、擬態語・擬声語に分類する。</p>	<p>・ 文化祭や移動教室で努力したことや感動したこと、来年度に取り組みたいこと等の心情を書かせた作文を用意する。</p> <p>・ 「語彙」は語句が集まってできるまとまりであること、一昨年、「彙」という漢字が、常用漢字に加えられたことなどを伝える。</p> <p>・ 色彩を使った表現、擬態語・擬声語、比喩、慣用句などに注目させ、「怒り」の心情には多くの表現の仕方があることに気付かせる。また、それぞれの語句のもつ印象の違いについてワークシートに記入させ、意見を交流させる。</p> <p>・ 類義語辞典や国語辞典を用いて、この場面の心情等を表わすのに、よりふさわしい表現を探し、語句カードを作成し、追加する。</p> <p>・ 「語彙」とは語句の集まりであることを確認し、次回は作成したカードを分類整理することを伝える。</p>	<p>手紙文から「怒り」の表現を抜き出すことができる。</p> <p>ア②観察 表現の違いから作者の心情の動きを読み取ることができる。</p> <p>ウ ワークシート</p> <p>場面に合った適切な語句カードを作ることができる。</p> <p>ア①観察 エ①カード 観察</p>

(第2時)

① 本時の目標： 語彙の広がり学び合うことで身に付けた語彙を生かし、表現を工夫して文化祭や移動教室の作文を書き直す。

② 本時の学習と評価

学習活動	留意点	評価規準・評価方法
<p>○ 本時のねらいを確認する。</p> <p>○ 作成したカードを確認する。</p> <p>○ 表を貼り出し、X軸とY軸について説明を聞く。</p> <p>○ 表を完成し、語彙の広がりを実感する。</p> <p>○ 200字～300字程度で作文を書き直す。</p> <p>○ 書き直した作文を発表する。</p> <p>○ 次時の学習内容を知る。</p>	<p>・ 語句を集めて語彙にする作業を行い、語彙を生かして行事作文を書き直すことを伝える。</p> <p>・ 難しい語句は、裏に記入した意味を読み、共有させる。</p> <p>X軸：表現の工夫 Y軸：気持ちの強さ</p> <p>・ 表を用いて語句を分類する。日頃発言しない生徒の意見も求め、他の生徒の理解を確認しながら進行する。</p> <p>・ 気持ちの強さや状況をよりの確に表現する語句があることに気付かせ、このような言葉のまとまりが語彙であることを理解させる。</p> <p>・ 「語彙」とは何か、「語彙の広がり」を理解することができたかを確認する。</p> <p>・ 比較する行事作文と同じテーマでもう一度書かせる。</p> <p>・ 自分の心情を相手に伝えるために適切な語句を選び、表現するよう指示する。その際に類義語辞典や国語辞典を使わせる。</p> <p>・ 電子黒板を用いて、生徒の作文を映し、表現の工夫をしている箇所を指摘させる。</p> <p>・ 次時は、完成した作文を読み合い、相互評価する中で、語彙を豊かにしていく活動を行うことを伝える。</p>	<p>新しく出てきた語句の意味を理解している。</p> <p>エ②観察</p> <p>語句カードが表のどの位置に当てはまるか、発言することができる。</p> <p>エ①観察</p> <p>以前書いた作文とは異なる表現を用い、より適切な語句を選んで作文を書いている。</p> <p>イ①作品</p>

(第3時)

①本時の目標： 書いた文章を互いに読み合い、表現の工夫や効果などについて意見を述べ合うことで、適切な語句の使い分けを知り、自分の表現に生かす。

② 本時の学習と評価

学習活動	留意点	評価規準・評価方法
<ul style="list-style-type: none"> ○ 本時のねらいを確認する。 ○ 3～4人班隊形にして、互いの作品を読み合う。 ○ それぞれの作品の中で工夫されている表現を探し、ワークシートに書く。 ○ ワークシートを基に、班で意見を交流し合い、班の中で全体に紹介したいと思う作品を選ぶ。 ○ 班で選んだ代表作を全体の前で発表し、工夫している表現を当て合う。 ○ 今回の学習内容を振り返り自己評価カードを書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 作文を読み合い、相互評価することを伝え、作文に使われている語句がその時の状況や心情を伝えるのに適したものか、使われている語句のどのような点が優れているか、具体的に評価するよう指示する。 ・ 書き直す前と書き直した後の作文ではどのような点が異なるか、注意しながら読むように指示する。 ・ どのような点が工夫されているか、表現として優れているかを詳しく書かせる。また、表現としての工夫だけではなく、作文で用いた言葉の響きや味わいが、状況や心情を伝えるものとして適切かどうかについても考えさせる。 ・ 班員の意見の共通点や異なる点を確認させる。 ・ 代表作品を電子黒板に映し、クラス全体で作品を共有できるようにし、良かったところはどこか、クラス全体で意見を交流させる。 ・ 意見交流後、代表作品を書いた生徒に、以前の作文と表現を変えた部分についての工夫を発表させ、理解を深めさせる。 ・ 語彙を豊かにすることで、生活にどのような変化がもたらされるか考えさせる。 	<p>優れた表現について、また工夫すべき表現について適切な理由を挙げて指摘できている。</p> <p style="border: 1px solid black; padding: 2px;">イ②ワークシート</p> <p>書き手の表現の工夫を積極的に読み取り、自分の表現に生かそうとしている。</p> <p style="border: 1px solid black; padding: 2px;">ア②観察</p> <p style="border: 1px solid black; padding: 2px;">自己評価カード</p>

〈指導例 2 : 第 2 学年〉

(1) 指導のねらい

『走れメロス』に用いられている心情を表わす語句や慣用句、類義語等に注目しながら、登場人物の心情を読み取らせ、豊かな語彙から豊かな表現が生まれることに気付かせる。また、語句の選択や表現の工夫に込められた作者の意図を考えさせ、自分の表現に生かそうとする態度を育む。さらに、漢語的な表現や日常的に使用する機会の少ない語句や表現に意図的に向き合わせることで、語感を磨かせ、語彙を豊かにさせる。

(2) 教材観

教材名 『走れメロス』 太宰 治 (光村図書 第 2 学年)

○ 『走れメロス』

主人公メロスとそれに相対する暴君ディオニスとが状況の変化の中で内面的な変容を遂げていく様が見事に描かれており、生徒にも人気が高い。登場人物それぞれの葛藤や苦悩、人間的な変化を読み取り、その生き方を考えることで、生徒自身にもまた、自己を深く見つめる契機を与えてくれる作品である。

長文短文の混在や豊かな比喩表現、巧みな漢語的表現など、語彙の指導という観点から見ても有効な教材である。これまで使ったことのない語句や表現の魅力を感じ取らせることで、語彙を豊かにし、表現する力を高めようとする意欲を喚起できる教材である。

○ 太宰治になって書こう

太宰治になったつもりで、自分の作文を書き直す。『走れメロス』の文体や表現、語句を意図的に用いて文章を書くことで、自己の表現語彙を増やすとともに、表現を工夫する楽しさや印象の変化に気付かせる。また、作品を互いに読み合う場面を設定し、相互に学び合い更に学習意欲を高めさせる。

(3) 評価規準

観 点	ア 国語に対する 関心・意欲・態度	イ 書く能力	ウ 読む能力	エ 言語についての 知識・理解・技能
	① 文章の内容や表現に注意して読み取り、自分の考えをもととしている。 ② 文章の表現を自分の表現に生かして文章を書こうとしている。	① 学習した語彙を活用して、心情が読み手に伝わるように表現を工夫して文章を書いている。 ② 互いの文章を読み合い感想を交流し、自分の考えを広げている。	① 心情を表わす語句、慣用句、類義語に着目し、登場人物の人物像や心情を読み取っている。 ② 文章に表れているものの見方や登場人物の生き方について自分の考えをもっている。	① 類義語の意味や用法の違いを理解している。 ② 自分の心情を効果的に表現するために、文章中の言葉の意味や活用の仕方に注意して、作文に使う言葉を決めている。

(4) 指導計画（9時間扱い）

- ① 『走れメロス』の「笑う」「怒る」に着目し心情の理解を深めるとともに、作者の表現の工夫を学ぶ。
- ② 合唱コンクールの作文を「太宰治の視点」で書き直す。
- ③ グループで作品を読み合い、工夫した点を相互評価し、班の代表作品をクラス発表する。

(5) 指導の展開例（・学習活動 □指導上の留意点）

時	各時間の目標	主な学習活動 指導上の留意点	評価規準 評価方法
1	◆心情を表わす語句、慣用句、類義語などに注意して全文を読み、初発の感想をもたせる。	□それまでの語彙学習を想起し、「笑う」「怒る」の類義語が数多く出ていることを事前に話し、活動に関心をもたせる。 ・通読中に気が付いた、心情を表わす語句・慣用句・類義語に線を引く。 ・初発の感想、印象に残った場面を発表する。 ・読めない漢字、難語句を確認する。 □辞書学習を宿題にする。	ア① 観察 エ① 観察 ノート 発表
2 ・ 3	◆語句の確認をさせる。 ◆あらすじを捉えさせる。 ◆場面からメロスの人物像を捉えさせる。 「笑う」の類義語を抜き出して、それぞれのニュアンスの違いを感じ取り、王の気持ちを考えさせる。 「怒る」の類義語を抜き出して、それぞれのニュアンスの違いを感じ取り、メロスの心情を理解させる。	・難語句を確認する。 ・登場人物の関係や出来事を捉える。 ・「笑う」「怒る」に焦点を合わせて、メロスと王の会話などから二人の心情を捉える。 □憮笑(王)、嘲笑(メロス)、低く笑う(王)、ほくそ笑む(王)、せせら笑う(濁流) 激怒・いきりたって・じだんだ踏む・ものも言いたくなくなった(全てメロス) → このような言葉から王、メロスの心情を考えさせる。	ア① 観察 ウ①ノート 発表 エ①観察 ノート 発表
4	◆試練を乗り越える場面のメロスの気持ちの変化を捉えさせる。 (心情曲線などを使用する。)	・メロスに与えられた試練を追いながら、試練の前後の心情を読み取る。 ①故郷への未練 ②川の氾濫 ③山賊の出現 ④心身の疲労 ・心情を表す表現を見付け発表する。 ・メロスの心情を表す情景描写を探す。	ア①観察 ウ①ノート 発表 エ①観察 ノート 発表

4		<input type="checkbox"/> 脚注にある語句にも着目させ、語彙を豊かにさせる。 <input type="checkbox"/> 工夫されている表現を取り上げて、作文に生かすことを意識させる。	
5	◆メロスの生き方について自分の考えをもたせる。	<ul style="list-style-type: none"> ・メロスの人物像を振り返り、共感できる点、できない点を考え、ノートにまとめる。 ・班になって発表し、自分の考えの理由を明確にして発表する。 ・相手の発表を理解できるよう、メモをとる。 	ア①観察 ウ②観察 ノート イ①②発表 観察
6	◆「走れメロス」の表現に着目して再読させ、「走れメロス」の表現上の工夫や文章の特徴を理解させる。	<ul style="list-style-type: none"> ・表現の違いによって、印象がどう変わるか考える。 ・「メロスは激怒した」「勇者はひどく赤面した」の他の表現方法を考え、それぞれを比較する。 ・なぜ太宰はこの表現を選択したのかを考える。 ・「走れメロス」を再読し、表現上の工夫や、語句の効果的な使い方などに注意して読む。 ・工夫されていると思うところをノートに書き出し、どのような工夫が感じられるか自分の考えをまとめる。 ・グループで互いの意見を発表する。 ・グループでの意見をクラスで発表する。 <input type="checkbox"/> 表現方法によって印象が変わることを理解させ、次回の作文に生かす。	ア②観察 ウ①ノート エ①観察 ノート 発表
7	◆太宰治になって作文を書かせる。	<ul style="list-style-type: none"> ・「走れメロス」はどのような視点で書かれているか考える。【メロスの視点、太宰（第三者）の視点】→その箇所を探す。 ・合唱コンクールの作文を書き直す。その際、単なる書き直しではなく太宰治になったつもりで書く。 ・「走れメロス」の表現で普段使わない言葉を見付け、その言葉を用いる。また、「走れメロス」の表現を参考にして作文を書き直す。 <input type="checkbox"/> 類義語辞典、国語辞典を活用し、最も表現したい心情について表現方法を考えさせる。	ア②観察 作品 エ①②観察 作品 イ①②作品
8	◆友達の文章を読み、交流し、良い点を発表させる。		

8		<ul style="list-style-type: none"> ・工夫している点や豊かな表現力が感じられる点などの意見を述べたり、助言をしたりする。 ・3人の意見の共通点や異なる点を確認する。 ・班の中で最も良い作品を選び、推薦理由をまとめる。 	
9	◆班で選んだ代表作を発表し、工夫している点を探させる。	<ul style="list-style-type: none"> ・班の中で作品を一つ選びクラスで発表する。その際、選ばれた理由も発表する。 ・発表を聞き、工夫点を探す。 	ア①観察 イ② 観察 発表 ノート

(6) 生徒作文から (抜粋)

【資料】生徒作品①

観客のすき間を歩きながら、〇〇は身震いした。しかし、それすらも減点の対象になったらたまらないと、すぐにやめる。

今日は年に一度の合唱コンクールである。この日のために全員が一生懸命に練習してきたのであった。その努力が今試されるのだ。身震いたくなるというのも無理はなかった。

あるクラスを見てだれかが言った。

「このクラスには負けたくない。」

他のクラスを見てだれかが言う。

「このクラスには勝てないかもしれない。」

そんな言葉聞きながら〇〇は思う。ああ、本番などなければいい。来ない本番のために一生懸命練習する。しかし、それでは満たされない。結果の出ない練習ほどむなしいものはないのだ。練習は本番のためにあるものなのだ。

〇〇はやるしかないかと割り切り、ステージへの階段を上った。頭の中は緊張と興奮で真っ白だった。

前を向くと、大勢の人の目が見える。その目一つ一つが自分だけをにらみつけているような錯覚に陥りそうになるが、あともう一步のところまで踏みとどまった。よく考えろ、ほらひな段がこんなにも震えているではないか。誰もが緊張で震えている証だ。〇〇はよく自分に言い聞かせた。そうでもしなくては緊張のあまり声が震えてしまって歌えたものではなかったのだ。

合唱が始まる。出だしの音が心配で声が小さくなってしまった。それは〇〇だけではなかったようで、始まりは弱々しい音だった。しかし中盤以降は安定した。全員緊張に慣れたのか、はたまた指揮がうまいのか、それとも両方なのかは定かではないが、とにかく安定した。それに〇〇はほっと息をつく。気付いたらここまで来ていたのだ。このままいけば大丈夫。そんな安心がそこにはあった。

二曲目も一曲目同様出だしは不安定だった。それを不安に思ったのか、合唱が崩れる。それは運が良ければ分からないほど些細なことだったが、ガラス細工のように不安定な彼らの精神を乱すには十分なものだった。少し本当に少し指揮のスピードが速まっていく。ほんの少しだが確かな違いだった。(後略)

生徒作品②

(前略) 舞台の上で〇〇は自分に問いかける。緊張している？ していないと言ったらうそになる。でも自分たちの成果を出し切れればそれでいいんだよ、と〇〇は思う。

指揮者が構える。ピアノの音が聞こえる。そして、大きく息を吸った。

それからはとても短かった。頭を使う必要なんてない。気が付くと、歌っていた。長いようで短かった。一瞬でもあり、永遠でもあった。ピアノの音が小さくなり、やがてやんだ。たくさんの拍手が聞こえた。(後略)

生徒作品③

〇〇は驚いた。自分の声の小ささとこの緊張感に。南無三、何かがおかしい。歌っている気がまったくしない。ホールの中で光を浴び、四肢が震える。この大事なときに緊張という壁が現れるなんて思いもしなかった。途中で歌えなくなるのは、始めから何もしないのと同じことだ。神も照覧、私は精一杯に努めてきたのだ。喉がかれるまで歌ってきたのだ。ああ、できることならこの緊張だけでも解いてほしい。この努力の魂を見せつけてやりたい。・・・

生徒作品④

彼は茫然とした。合唱コンクールの結果発表。彼はボーッとしながら結果を待っていたが、どうせ無理だと思っていた。

しかし神様が選んだのは、彼がいるE組だった。彼は茫然とした。彼は「ああ神様、無理だと思っていた私にこんなに大きな賞をくださり本当に感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございます。」と心の中でたくさん叫んだ。(後略)

生徒作品⑤

〇〇は驚愕した。自分の心身はこれほど緊張の色を隠せないものなのか、と。鼓動は高速に脈を打ち、(後略)

生徒作品⑥

2-Aの歌が始まった。最初で最後の2-Aの舞台だ。〇〇は会場を覆う緊迫した空気に飲まれぬよう奮闘しているように見えた。(後略)

生徒作品⑦

神は彼女に、信じなさいとささやいた。人を疑うのは最も恥すべき悪徳だ。まして、長らく同等の苦難を乗り越え、勝利への強い渴望があったというのに。自らが信じず、他人が信じるはずがなかろう。…今、強く手を握りしめ、額に手をあてがえば、きっと望みはかなうだろう。さあ、彼女に信実の悦楽を。(後略)

それぞれが太宰治の表現を活用しながら、以前の作文より工夫を加えて表現できた。作品①では、難しい言葉を使わず、言葉を選択して心情や様子を巧みに表現できている。②では、太宰治の文章のように一文を短くすることによってリズムを生み出している。また「一瞬でもあり、永遠でもあった。」と対の言葉を活用して時間の感じ方を上手に表現できている。③では「走れメロス」の文体や表現をまねして合唱コンクールの様子を表現することができた。④を書いた生徒は作文を苦手としていたが、今回の作文は開始してすぐ書き始めていた。以

前の作文では「(前略) ホールに着き、友達とがんばろうねと話していました。そして始まり
ました。(中略) 最優秀賞E組と言われてはとってもビックリしました。」と書いていた
が、今回の作文では、受賞した瞬間の様子や心の声まで表現することができている。⑤、⑥
は緊張感あふれる様子がよく伝わる文を書くことができた。

以前は、単に時間の流れを追うような作文が多かった。しかし、今回の学習を経て多くの
生徒が自分の心情や様子、体験したことを工夫して具体的に表現することができるように
なった。また、発想も豊かになっている。

(7) 成果と課題

ア 成果

「走れメロス」の表現の工夫や言葉の使い方に留意しながら読みを深め、また冒頭の「メ
ロスは激怒した。」という一文を自分たちの言葉で表現してみることで、受ける感じが全く違
うことを理解できた。以上のような読みの深まりを生かして、合唱コンクールの作文を書き
直して、各自の作品を作ることができた。類義語辞典、国語辞典を活用し今まで使ったこと
のない語句を使ったり、表現方法を工夫したりすることで、最初に書いた作文より、工夫し
た深まりのある作品になった。次に、その作品を読み合うことで、それぞれの作品の表現の
工夫や効果を相互評価した。その結果、生徒からは「自分が工夫した点を分かってもらえたり、
他の生徒の工夫した点を見付けたりすることが楽しかった。」という感想が上がった。また
「語彙が豊かになると、自分の気持ちに合った言葉を見付けることが実感できた。」という
感想もあった。全体として、語彙を豊かにする生活を心がけようという意識が高まった。

「読みの深まり」「表現の工夫」「成果の確認・意欲の喚起」というサイクルで授業を展開
することで語彙を豊かにするという意識が高まり、授業開始前より、表現力が高まった。

※ 授業終了後に行ったアンケートからも、生徒の語彙に対する意識の変化がうかがえ、ど
ちらのアンケート項目についても、85%以上の生徒が語彙学習に意義を感じている。

互いの作品を読み合い、工夫した点な どを伝え合えて楽しみや喜びを感じるこ とができましたか。	%	普段から意識して語彙を豊かにしてい こうと思いましたか。	%
思わない	1	思わない	2
あまり思わない	7	あまり思わない	9
少しそう思う	25	少しそう思う	19
そう思う	26	そう思う	36
とてもそう思う	38	とてもそう思う	32

イ 課題

今回は「走れメロス」を読みの教材として取り上げたが、説明文でも同じように豊かな語
彙を身に付けるための指導の工夫が必要である。教員は生徒に対し常に語彙を豊かにするこ
とを意識付けることが大切である。文章を書くときには、国語辞典や、類義語辞典を準備し、
辞書をこまめに引く習慣を付けていきたい。その際単に難しい言葉を置き換えて使うのでは
なく、状況や気持ちを的確に表す言葉が選択できるような力を付ける指導が必要である。

〈指導例 3 : 第 3 学年〉

(1) 指導のねらい

第 3 学年の語彙指導では、中学校での国語科の学習の集大成として、様々な文章の工夫された表現や、その表現に込められた作者の意図に注目し、自己の文章表現の工夫に生かそうとする意識の向上を図る。生徒は自分の進路を見つめ、社会への一步を踏み出そうとしている。それは同時に現在の自分のありようを再認識することでもある。様々な出来事や人々との関わりの中で自分がどのように変化してきたかを振り返らせ、文章で表現させることで、自分の成長を確かめ自信につなげる機会としたい。同時に、前段階に学習した『故郷』の比喻表現の効果や、2 年次の『走れメロス』の表現や語句の工夫等を自己の表現に生かし、これまでの学習の成果を確かめ、新たな学びへの意欲を喚起する場面とする。

(2) 教材観

教材名：『あの時かもしれない』（エッセイを書く）（学校図書 第 3 学年）

『パールハーバーの授業』（随想） 猪口邦子（学校図書 第 3 学年）

『あの時かもしれない』（エッセイを書く）は、人との関わりの中で自分が成長した体験を基にエッセイを書く教材である。『パールハーバーの授業』は、筆者がアメリカン・スクールでたった一人の日本人としてパールハーバーに関する授業を受けることになった時の苦悩と、そんな自分を救ってくれた教師や仲間の温かさを記したエッセイである。筆者はこの経験を機に大人への一步を踏み出し、世界平和に貢献する仕事への憧れを抱くようになる。

両教材とも、正に、中学校で様々な経験をし、今、自己を振り返り未来を見つめようとする 3 学年の生徒たちに、一つの指針を与える教材である。同時に、自分自身の中学校生活の様々な場面と照らし合わせながら読むことができ、「自分だったら何をどう書くか」という意欲の喚起につながる要素ももっている。主体的に表現活動に取り組み、併せてこれまでの学習の成果を生かす場として、二つの教材から「書く」活動へと展開させたい。

(3) 評価規準

観点	ア 国語に対する 関心・意欲・態度	イ 書く能力	ウ 読む能力	エ 言語についての 知識・理解・技能
	自分の忘れられない出来事とそれに関わった人を振り返り、言葉を工夫しながら表現しようとしている。	① 自分を振り返り、年表を書いている。 ② 経験や思いを言葉に結び付け、工夫して表現している。 ③ 互いの文章を読み合い表現の仕方などについて評価して、自分の表現に役立てるとともにものの見方や考え方を深めている。	筆者の表現の工夫や言葉選びの意図に着目しながら、文章に表現された筆者の経験やそこから得たものを読み取っている。	① 経験や思い出などを表現するための筆者の言葉選びや工夫に気付いている。 ② 筆者の言葉選びを参考にして、よりふさわしい言葉を選び、語彙を豊かにして文章を推敲し、言葉や表現を工夫している。

(4) 指導計画（6時間扱い）

- ① 『あの時かもしれない』を読み、人との関わりの中での自分の成長を文章にまとめる。
- ② 『パールハーバーの授業』を読み、表現の工夫や語句の選び方を参考に文章を推敲する。
- ③ 互いの文章を読み合い、内容や表現の工夫等について意見を交流し、互いに学び合う。

(5) 指導の展開例（・学習活動 □指導上の留意点）

時	各時間の目標	主な学習活動 指導上の留意点	評価規準 評価方法
1 ・ 2	◆自分のこれまでを振り返り、人との関わりの中で、大人に近付いたと思う経験を文章（エッセイ）にまとめさせる。	<ul style="list-style-type: none"> ・教材『あのときかもしれない』を読み、これまでの中学校生活を振り返る。自分にとって忘れられない出来事とそれに関わった人を中心にした簡単な年表を作成し、思い出したことをメモする。 □自分の体験を振り返りながら、出来事や人との関わりの中での自分の成長や変化、新たに発見したことなどに注目させる。 ・年表やメモを基に「新たに気付いたこと」、「そのきっかけ」、「自分にとっての意味」などを整理して文章にまとめる。 □第一次原稿であること、構成を整えて分かりやすく書くことなどを伝える。 	ア 観察 ワークシート イ① 観察 ワークシート イ① 観察 ワークシート
3 ・ 4	◆『パールハーバーの授業』を、筆者の言葉選びや表現の工夫に着目しながら読ませる。	<ul style="list-style-type: none"> ・『パールハーバーの授業』を読み、文章に表現された筆者の経験とそこから得たものを読み取る。 ・工夫された表現や印象的な語句について、類義語や別の表現などを考えたり、その言葉や表現に込められた筆者の思いを考えたりする。 □類義語や別の表現と比較しながら、ニュアンスや印象の違いを考えさせたり、筆者の言葉選びの工夫や意図を考えさせたりする。 (例) 「憂鬱」、「人力車の挿絵ときのご雲～暗記してしまっていた」、「世界の救世主対悪魔の落とし子の対峙する構図」、「先生は見えない魔法のつえを持っていて…」、「歴史に対する暴力」、「私の中にもう一人の自分を発見する」など 	ウ① 観察 エ① 観察、ノート
5	◆自分が書いた文章について、言葉選びを意識して推敲させる。 ◆自分の文章の推敲	<ul style="list-style-type: none"> ・『パールハーバーの授業』や、これまで学習してきた文章での表現の工夫や言葉選びを参考にし、自分の書いた文章を推敲する。 ・自分の文章の推敲や言葉選びのポイントを発表原稿としてまとめる。 	ア 観察 ワークシート イ② 観察 ワークシート

	<p>のポイントを明らかにさせる。</p>	<p>□『パールハーバーの授業』をはじめ、これまで学んできた文章や自分の身の周りにおける印象的な表現、言葉などを例に挙げ、生徒が表現の工夫のイメージを広げられるようにする。</p> <p>□工夫して表現するために、言葉探しや言葉選び、語彙を豊かにしていくことを意識させる。</p>	<p>エ② 観察 ワークシート</p>
<p>6</p>	<p>◆推敲後の二次原稿を読み合い、表現の工夫や推敲のポイントを踏まえながら、表現のすばらしかったところ等を互いに評価させる。</p> <p>◆班の代表者による発表を聞き、表現の工夫や言葉選びなど、今後の自分の表現に生かしたいことなどを感想にまとめさせる。</p>	<p>・5～6人班をつくり、二次原稿を読み合う。</p> <p>・班員の言葉や表現の工夫に着目して評価し、班の代表を決定する。</p> <p>□言葉選びや表現の工夫の優れている点など、代表を選ぶことを意識しながら評価させる。</p> <p>□言葉選びや表現の工夫の優れている点などを出し合って班の代表者を決定させ、代表者の文章のおすすめの理由をまとめさせる。</p> <p>・各班の代表により、クラス全体発表を行い、評価された理由とともに、評価し合う。</p> <p>□代表者の発表を聞き、それぞれの表現の工夫や推敲の優れている点などを評価させる。</p> <p>・学習の感想をまとめる。</p> <p>□発表を聞き、これまでの自分の取組も振り返り、今後の自分の表現に生かしたいことなどを感想にまとめさせる。</p>	<p>イ③ 観察 ワークシート</p> <p>ウ 観察 ワークシート</p> <p>エ① 観察 ワークシート</p>

【資料】 生徒作品①「第一次原稿」

あのとかがもしれない

学習プリント(作文用紙)

組 番(氏名)

☆中学校生活を振り返り、人との関わりの中で成長した体験を文章にまとめよう。
○書く順番(構成)を覚える。
○言葉(想)を出し、順番を区別し、書く。
○主題を明らかにしながら書く。

あのとかがもしれない

私は三年のとき、カサを何番かに持っていた。そのときはあまりに突然の出来事だ。雨のどろどろしていい気分が、私に襲いかかってきた。雨の日のバケツの姿も見えなかった。私は気がまぎまぎした。持っていた人は、私にカサを貸した。雨の日のバケツの姿も見えなかった。私は気がまぎまぎした。持っていた人は、私にカサを貸した。

【資料】全体発表会評価・まとめの感想ワークシート

あのときかもしれない
全体発表評価プリント
組番氏名()

《全体発表会評価表》

発表名 表現の工夫や推敲のポイント
表現の工夫が
表現が良かったところ
感想のポイント

	六	五	四	三	二	一
	「区内の中学校を引退し地とした。」	「私の悔しい気持ちは達成感に変わっていった。」	「自分の味着心を心の中心にたもとをアトに。」	「感動で感じているよを比喻表現をたくさん使っている。」	「ピトンをつなぐと心もつながる。」	「より相手に伝わるようにした。」
	表現の工夫が 表現が良かったところ	表現の工夫が 表現が良かったところ	表現の工夫が 表現が良かったところ	表現の工夫が 表現が良かったところ	表現の工夫が 表現が良かったところ	表現の工夫が 表現が良かったところ
	感想のポイント	感想のポイント	感想のポイント	感想のポイント	感想のポイント	感想のポイント

(6) 成果と課題

ア 成果

生徒の感想の中に「発表した人たちは比喻や表現を工夫していてすばらしく、自分はまだまだなので自分ももっと工夫したい」「自分で工夫しながら書いてみて、そして他の人の発表を聞いて、語彙が豊かになった気がする」「自分の表現力、語彙力を向上させるために本をたくさん読んだりして、書く力をもっとつけたい」「友達の成長したことを聞いて共感したり新しい発見ができたりして、自分でも気付いていない成長したことがまだありそうだと感じた」などの意見が多く見られた。自分を成長させてくれた経験や思い出など、自分にとって大切なものを表現するために言葉を探し、表現を工夫し、文章をより良いものにしようという姿勢を育てることができた。また、表現を工夫する過程で、書く材料が自分にとってどんな意味をもつかなどを再発見したり、再認識したりできる楽しさにも気付かせることができた。言葉や表現を探し、選んで使おうとする意欲、他の人のすばらしい表現が刺激になり、更に自分の表現を磨き、語彙を豊かにしていこうとする意欲の向上につながった。

イ 課題

生徒の感想に「工夫して比喻をたくさん使うのもいいけれど、比喻を使い過ぎると形だけの、伝えたいことがよく分からない文章になってしまう」、「いろいろな表現や比喻をガツガツ入れても伝わりづらい。自分の言葉で書くことを最優先にして、これからも文を書いていきたい。」とあった。実際、二次原稿の推敲で、工夫しようとするほどシンプルな表現になるという課題も見えた。ただ、このことは「とにかく表現を工夫してみる→工夫した表現を精査し、その工夫がより適切・効果的であるかを考えて使う」という学習過程を経ることで、生徒たちの表現の工夫や言葉探しの営みの深まりにつながっていくものである。

VI 研究のまとめ

「語彙を豊かにし、表現力を高める指導の工夫」をテーマとして、3学年にわたる指導例とその成果・課題を報告した。書く能力の向上、又は書くことへの苦手意識の払拭は、教育現場が直面している大きな課題の一つである。語彙を豊かにすることで表現力の向上を図り、表現することの喜びや楽しさを感じさせ、そこから次の学びへの意欲を喚起する。それが、本研究の核心である。この視点から、各学年の取組についてまとめる。

●第1学年

第1学年の検証授業では、まず同じ内容を「長い文章で書けた」ということへの驚きと喜びの声が多く上がった。語彙の広がりを意識し、言葉の選び方や表現を工夫した結果、より多くの言葉が生徒の中から引き出されたということである。また、「すごい、ビックリの連発でした」という一文が、「あこがれの3年生の演技は、目がキラキラとなるくらい、興奮しました」と言い換えられた。そこには明らかに「量」だけでなく「質」の向上も認められる。良い表現ができたという自覚は、今後様々な表現の場でも生かされるものと考えられる。

●第2学年

第2学年では、他者の文体を借りる活動を通して、もう一段階上の「表現する楽しさ」を追求した。「書きたいことはあるがどう書いていいかわからない」という生徒は多い。しかし、「太宰治になりきって『走れメロス』のように書いてみる」という活動では、「この言葉をどこかで使いたい」「この言い回しを取り入れたい」など、生徒は意欲的にかつ楽しみながら書く活動に取り組んだ。また、太宰治になりきることで、自分の中になかった語句や表現に積極的に向き合った。その結果、作品例に挙げたように、巧みに工夫された表現が生み出された。この経験は、今後様々な文章を読む際、優れた表現に注目し、それを自分の表現活動に生かそうとする姿勢につながるものであり、先に示した「学びのサイクル」の一例と言える。

●第3学年

第3学年では、語彙の指導から表現の深化への展開を試みた。自己を見つめ表現するという取組は、最高学年の生徒にとって重要かつ困難な課題である。ここではそれを解決する一つの手立てとして、語彙の指導を位置付けた。他者の自己表現から自分の自己表現を学ぶという活動は、単に表現技法や使用語句の学びにとどまらず、他者と自分との間の「つながり」の発見を生む。語彙という一つの視点を通して自他を比較し、相違点や共通点を見出しながら、互いを位置付けていくのである。表現の工夫や語句の選び方を吟味しながら、相手をより深く理解しようとする。表現や語句の選び方を工夫することで、よりの確に伝えようとする。その双方向の営みは、コミュニケーション能力の向上を支えるものである。

豊かな語彙は、豊かな読者、豊かな表現者をつくり、豊かなコミュニケーションを生む。生徒の実態に即し、発達段階に応じた系統的な語彙指導を行っていくことが必要である。その際に忘れてならないのは、「学びが起きた」という児童・生徒の実感である。「話す・聞く」「書く」「読む」という活動の中で、いかにその実感を体験させることができるかが、指導の工夫として求められる大きな課題である。

平成23年度 教育研究員名簿

中 学 校 ・ 国 語

地区	学 校 名	職名	氏名
墨田区	墨田区立寺島中学校	教 諭	◎谷坂 龍蔵
台東区	台東区立柏葉中学校	教 諭	○渋谷 頼子
世田谷区	世田谷区立上祖師谷中学校	主任教諭	星野 美優貴
杉並区	杉並区立松ノ木中学校	主幹教諭	吉川 泰弘
府中市	府中市立府中第六中学校	教 諭	遠山 綾
国分寺市	国分寺市立国分寺第一中学校	教 諭	植田 ゆうみ
清瀬市	清瀬市立清瀬第五中学校	主幹教諭	勝山 しのぶ
稲城市	稲城市立稲城第一中学校	主任教諭	○石崎 弘子

◎ 世話人 ○ 副世話人

[担当] 東京都教育庁指導部指導企画課
指導主事 三浦 慶介

平成23年度
教育研究員研究報告書
中学校 国語

東京都教育委員会印刷物登録

平成23年度第181号

平成24年 3月

編集・発行 東京都教育庁指導部指導企画課
所在地 東京都新宿区西新宿二丁目8番1号
電話番号 (03) 5320-6836
印刷会社 有限会社 シーダー企画